

塩対応の

公子様に

~妖精と私に
暮らしたい
求婚されても
困ります!~

二度と
会わない
つもりでした

人物紹介

レジェス・アルシオン

アルシオン公爵家次期当主で、王国の騎士。美しい容姿をしているが心を許した人間以外には塩対応。自分を助けてくれた「リー」という女性を探している。

ルファ

犬の姿をした妖精：クー・シー。
リシーラといつも一緒に遊ぶ友達。
冷静でしっかりもな男の子。

リシーラ・ミゼル

セレンディア王国ミゼル子爵家令嬢。チェンジリングによって妖精界で暮らしていた過去を持ち、妖精の姿を見て話ができる。人間界に感心が薄い。



パトリア

アルシオン公爵家の分家の伯爵令嬢。レジェスの幼馴染で、妻の座を狙っている。そのためには手段を選ばないことも。

ケイン・ザーラント

アルシオン公爵家の騎士。
レジェスの良き友人で、陽気な自由人。

アンナ・ミゼル

現ミゼル子爵家夫人。
優しく穏やかにリシーラを思いやっている。犬好き。

メギー

犬の姿をした妖精：クー・シー。
リシーラといつも一緒にいる。大人っぽい性格の女の子。

イータ

犬の姿をした妖精：クー・シー。
リシーラといつも一緒にいる。友達。明るく無邪気な性格の男の子。



塩対応の公子様に 二度と会わないつもりでした

～妖精と暮らしたい私に求婚されても困ります!～

CONTENTS

プロローグ	6
一章 国境の町での出会い	10
間章 ～一～	70
二章 そしてお茶会会場へ	77
間章 ～二～	95
三章 二度目のお茶会は	110
間章 ～三～	181
四章 婚約者選びの最終段階	187
間章 ～四～	219
五章 パーティーの日は死者の門が開く	237
エピローグ	294
番外編 結婚式のその前に	305



プロローグ

黄色や赤の薔薇が咲き乱れる広い庭。

背景にはいくつものアーチ窓が見える繊細な白壁の館が控えている。

まさに貴族の庭園という光景の中心には、いくつもの白いテーブルと椅子が置かれていた。

テーブルの上には白のティーセットと、ケーキスタンド。

席には色とりどりの華やかなドレスをまとった令嬢達が座っている。

令嬢達はこの日、お見合いを兼ねたお茶会に出席していた。

彼女達を見渡せる場所に、招待した公爵夫人が立っていた。

自分は主役ではないと淡いブラウンのドレスを着た公爵夫人だが、この場を管理している者としての存在を強調するように、そのドレスには金糸と布で作られた薔薇がいくつも縫い付けられ、その周囲には貴石がきらめいている。

公爵夫人の隣にいるのは、背の高い二十代の青年だ。

白金の髪、金緑の瞳の青年はやや鋭い視線で令嬢達を眺めている。

表情も固く、およそ年頃の男女の出会いを意図して開催されたお茶会にはふさわしくない。

それでも美しい顔とすらりとした体型。それでいて広い肩幅といった『女性の理想が絵画から服を着て出てきた』ような彼に、令嬢達は目を奪われていた。

身に着けた藍色の上着も、装飾のあるマントも、豪華なのに顔立ちが負けていないどころか、青年の容貌を引き立てているくらいだ。

こんな人は、そうそういないだろうが……。

リシーラがそつと彼から視線をそらした時、公爵夫人が青年を紹介した。

「こちらは我が甥^{おひ}のレジエスです。騎士としてつい数か月前の国境戦にも参加しておりましてせいか、少し無骨なところはございますけれど、よろしく願いますね」

そして紹介された青年、レジエスはむすつとした表情のまま一言。

「よろしく」

本当に素っ気ない挨拶だった。

令嬢達は想定外だったらしく、目を丸くしている。

なにせ令嬢達が集められたのは、このレジエスの結婚相手を選ぶためだったから。

公爵夫人が彼のため、友好的な貴族家に声をかけて、今回の開催にこぎつけたので、みんな公子に「多少なりとも結婚したいという意思があるだろう」と思っていたはずだ。

ただ、ちよつとは令嬢達よりも熱量が少ないことは予想していたと思う。

容姿も良いと評判の公子なら、黙っていても結婚したがる人はいるだろうし……と。でもここまで素っ気ないのは想定外だったに違いない。

「あの、おひさしぶりでございます！ 覚えておいでですか？」

そんな中で果敢にも目立とうとした令嬢がいた。

波打つ黒髪の令嬢は、問題の公子と昔馴染みのようだが、公子の返事は甘さや優しさの片りんもなかった。

「知らないが」

空気が凍った。

親密さを醸し出そうとした令嬢も、笑顔がひきつっている。

公爵夫人が慌てて言った。

「ええと、まずは席に座ってお茶を飲みましょう！ レインブル産の初摘みで、リンゴの香りがする茶葉ですよ」

「ま、まあ素敵！ 憧れの茶葉ですわ！」

黒髪の令嬢もそれに乗って何事もなかったかのようにふるまい出し、周囲もなんとなくおほほと笑って凍った空気を追いつ出そうとした。

そんな中、リシーラはなるべくうつむいていた。

とにかく彼と目を合わせないようにしたい。

「こんなところで出会うなんて……」

リシーラにとっては、『アルシオン公爵家』の公子が見知った人物だったことが想定外だった。

（まさかでしょ？ 騎士だって言ってたのに、助けた相手が公子だったとか、そんなおとぎ話みたいなことあるかしら？）

それは数か月前の国境での戦いで起きた出来事。

そこでレジェス公子と、リシーラは出会ったのだ。



一章 国境の町での出会い

がたがたという音に気がついて、リシーラが目を覚ましたのは夜明けだった。辺境地にあるこの別荘は古く、一階の足音が三階まで響く。

そのせいだろうか、と考えた。

でもミゼル子爵家が無理に別荘を買うなら、古い物件になるのも仕方ない。

財力があるわけでもないのに辺境の湖水地方に、急に別荘を買おうとしたのが不思議だったぐら
いだ。

物音の原因が気になったリシーラは、起き上がることにした。

昨晚叩かれた頬がまだ痛いし、突き飛ばされたせいで打った背中も気になる。

できればまだまだ毛布の中でうずくまっていたいけど、今はだめだ。

こんな早朝からバタバタするなんておかしすぎる。

「そもそも、私が別荘地にいるのもおかしいのだけど」

普段のリシーラは、どこかへ連れていってもらうことなどなかった。

でも父が去年避暑に行った時に、他の貴族から『いつも娘さんを同行させていないようですけど、何か悪い病気なのですか？』と嫌味を言われたらしい。

そこで『娘は病気ではない、ただ家から出たがらないだけだ』というのを見せるためだけに、今

回りシーラは同行させられたのだ。

お披露目さえ終われば、あとは自由に過ごせるはずだった。

けれど、昨日は疲れのせいなのか、母の虫の居所が悪かったらしい。

『あなたなんて本物の娘のようなふりをしているだけでしょ！ 返しなさいよ娘を！』

『やめなさいナーシャ！ 魔術師に頼んでまで取り戻したんだぞ！』

『騙されたのよ！ わたくし達が見ていないところで、また妖精と話してたわ！ このチェンジリングは！』

チェンジリング。

それは妖精がいたずらで、自分の子供と人間の子供を取り替えてしまう現象だ。

人間の子は妖精の代わりに、妖精の世界へ送られてしまう。

そして人の子供とは思えない容貌の妖精の子供が残り、親は仰天するのだ。

五歳の娘がいるはずのベッドの中を見たら、知らない妖精の子供がいたという経験をしたリシー

ラの母は、それ以来心を壊していた。

驚き、悲しみ、妖精の子供を殺そうとしたのを、父が止めたと聞いている。

『だめだ。妖精の子供を殺してしまうと、自分の子供は戻ってこないと言うじゃないか』

とはいっても、庶民ならば妖精の気まぐれを願うしか、実の子を戻してもらう方法がない。

子供を失った親はたいいてい嘆き悲しみ——だからチェンジリングは嫌われる。

そして地域によってチェンジリングへの対応は違う。

妖精の子供を歓待して頼んで実の子を戻してもらう地域、いじめてこんなひどい世界に身代わりで居続けるのは怖いから、もう一度取り替える気にさせる、という地域もあるのだとか。

とにかく妖精の子供を捨てると、仮に実の子供が妖精界から戻ってきても妖精の子供を捨てた場所に現れてしまうので、それもできない。

リシーラの両親は、どちらの方法も使わなかった。

確実な方法を探し、魔術師を雇ってリシーラを取り戻したのだ。

でも、母の猜疑心さいぎしんが消えることはなかった。

『妖精が姿を変えただけかもしれないわ』

そう思ってしまう親や、周囲の人間は多いらしい。

だから一度チェンジリングを経験した子供は、いじめられることが多いのだと聞いたのは、リシーラが成長した後のことだ。

小さい頃は、わからなかった。

リシーラのことまで妖精かもしれないと疑い、追いつくとして叩く母親に混乱し、助けてくれない父親に絶望した。

時には家の中で見かけただけで母が騒ぐので、リシーラは一緒に食事をしたこともない。

使用人と一緒か、一人が常だ。

それ以外の人と食卓を囲むのは、領地に行った時だけ。

領地にいる従兄家族いとこはリシーラリシーラの状況を気の毒がり、母親から引き離す期間も必要だと父に嘘を

ついて、リシーラをたびたび泊めてくれていた。

その時には子供らしくのびのびとできた。それに家族のように温かく接してくれた従兄家族のおかげで、リシーラは全ての人を恨まずにいられるのだと思う。

リシーラを見るだけで人が変わったようになる母親だが、とにかく外出が好きだ。家庭内のことを忘れたいのかもしれない。

今日も貴族夫人達の集まりに行く予定になっていたはず。

だとしても、早朝から起き出して準備をする必要はないのに。

部屋を出たリシーラが目撃したのは、エントランスに積まれた荷物と、それが運び出される様子。外出の支度をした両親の姿だ。

「あの、お父様、一体……」

そう尋ねたとたん、母が叫んだ。

「チェンジリングがまた娘の真似まねをしているわ！ 早く閉じ込めて！」

「わかったわかった。こっちへ来なさい」

慌てた父と従僕が、苛立いらだった様子でリシーラの腕を掴つかんで引っ張る。

「何？ 一体どこに……」

「黙って来なさい」

父の有無を言わさぬ物言いに、リシーラは早々に諦める。

こうなると何を言っても無駄だ。

リシーラの意見より、借金までしている母の実家に遠慮し、父は全面的に母のために動くのだ。大人しく従うリシーラを連れて、父は使用人用の通路脇にある扉の向こうへ。

そこは倉庫だった。

小麦の匂いと、野菜についていた土の匂いが混ざって鼻に届く。

従僕が床の隅にある床扉を開けると、ぽっかりと穴が開いていた。

その向こうは、地下倉庫になっている。ワイン樽^{だま}が二つ三つ置かれているのが見えたから間違いない。

リシーラはそこに入るよう指示され、その通りにする。

一度拒否して、突き落とされたことがあるのだ。この後何をするにしても、怪我^{けが}をしない方がいい。

父はため息まじりに言った。

「本当はこんな風にはしたくなかったが……。お母さんは、お前を連れていくと錯乱^{さくらん}してしまう。それでは逃げる途中で、ロヴァール国の兵士にすぐ見つかる。だから置いていくが、地下室ならお前も見つからずに済んで、生き残れるかもしれん」

説明ともつかない話の内容に、リシーラは目を白黒させた。

「ロヴァール国？ 兵士に見つかる？ どういうことですか」

「今、ロヴァールの兵が国境に攻め寄せてきている。近くの国境の砦^{とりで}が落ちるのも時間の問題だ。だから逃げることにした」

「なのに私を置いていくんですか!？」

「それぞれが助かる可能性を上げるためだ。お前だってお母さんと一緒に、敵兵に見つかって殺されたくはないだろう」

そう言った父の目は、路傍の石を見下ろすように冷めている。

「ここに閉じこもっていた方が、見つからずに生き延びられるかもしれない。ではな」父の指示で、従僕が嫌そうな顔をしながら地下への扉を閉める。

一気にリシーラを暗闇が取り巻く。

そんな中、扉の上に何か重いものが引きずって置かれた音、去っていく足音がした。

——脱出できない。

そのことが、リシーラの心に恐怖を呼び起こした。

「え、私、邪魔だから置いていかれたってこと?」

状況を自分の中で整理し、愕然^{がくぜん}とする。

戦場に置き去りにされて、直接的ではなくとも殺されることになるなんて。

「……私のことをそうと認めていなくても、『リシーラのよすが』だから殺しはしないと思っただのに」

チェンジリングを殺すと、本当の子供は戻ってこない。

だから母は、返ってきた『リシーラ』を妖精だと思っただけでも、殺そうとはしなかった。

そんなことをしたら、本物の娘が帰ってこないと信じていたからだ。

けれど今、そんな暗黙の了解も破られてしまった。

「死んでもいいと、思われたのね」

ちよっと悔しいが、それよりもずっと悲しいことがある。

「あと一か月だったのに……」

十八歳を過ぎたら、リシーラは家を離れられるはずだった。

お金をためて家出するのではない。

十八歳になるまで結婚をしていなければ、妖精の世界へ招待してくれるという約束をしていたのだ。

あれはもう十三年前。

五歳のリシーラはチェンジリングで妖精の世界へ行った。

きっかけは判然としていない。

おそらくは子爵家の館に住む誰かが妖精に何か悪さをして、人間達をおどろかせるためにそれが行われたのだと思う。

そして、本物のリシーラは妖精界へ放り出された。

魚が空を泳ぎ、きのこの木が生え、笑いさざめく蝶ちようが舞う不思議な妖精界に。

ひとりぼっちで泣いていたリシーラは、妖精の女王とその配下の妖精達に保護された。女王達の優しさに包まれて、リシーラは思った以上に快適に過ごせるようになった。

そもそも実母と実父は、子供を愛情深く育てているわけではなかった。

跡継ぎではないけれど、婿を迎えて家を存続させられる子供として、リシーラの存在を喜んで
いた。でも乳母に育児を任せきりで、週に一度顔を見せるだけ。

その時に親を敬う態度を見せなければ、乳母ともども叱責される。

貴族にありがちな親子関係ではあったが、親に甘えたい盛りのリシーラには辛かった。

そんな話を聞いた女王に、リシーラは言われた。

『お前が望むなら、十八歳になるまで世界との結びつきを強めなければ、妖精界へ迎えてあげよう。
もちろん結婚もしてはならないよ』と。

その誘いは、リシーラにとっては心のよすがになった。

元の世界に戻った後、母に受け入れられることのない日々。それどころか、疑われ、暴力を受け
るたびに妖精界へ行きたい気持ちが強くなった。

だから、優しい年上の従兄夫婦から養子縁組の誘いがあっても、断った。

——新しいつながりができると、妖精の世界へ帰れないかもしれないから。

でも死んでしまつては、元も子もない。

『どうしよう、まだ死ねないのに……』

あと一か月だけ、どうにか生き延びなければ。

そう思った時、声が聞こえた。

「大丈夫？ リシーラ」

はっとする。

「ルフア？」

「うん。イータもメギーもいるよ」

「そうそう僕も」

「ワタシもいるわ」

沢山の小さな子供のような声が聞こえる。

それはリシーラに馴染みのある声だ。

「姿が見えないの」

「それなら明かりがあるよ」

ぱっと周囲が明るくなる。

そうすると、地下室の天井や置かれた空き樽、そして三匹の後ろ足で立ち上がった、服を着ているボーダーコリーのような姿が現れる。

「みんな！」

心細くなっていたリシーラは、すぐ近くにいた手首に赤いリボンを巻いている犬に抱き着く。

「心細かったよね、リシーラ。ほんとに人間ってやつはおかしなことばかりする」

「うん。こんな風に殺されそうになるなんて思わなかった。クー・シーのみんなが来てくれた良かった……」

彼らはクー・シー。犬の姿をした妖精だ。

人の世界で暮らしている妖精は沢山いる。ただ姿を見せないようにしているだけで。

リシーラは、妖精界であちらの食べ物を食べたせいなのか、妖精の姿が見えて話ができるようになっていたのだ。

彼らはリシーラが人間の世界に戻ってから出会って以来、ずっと側にいてくれていた。遠くにさえないなければ、呼ぶと来てくれるリシーラの貴重な友達だ。

「そうだ、このままだとみんな戦争に巻き込まれちゃうわ!」

リシーラはそのことに気づいて、慌ててクー・シー達に逃げようと誘いかける。するとクー・シー達は顔を見合わせて、困ったように言う。

「たぶん、走って逃げるのは難しいよ。リシーラは僕らみたいに空間を移動できないし」
「じゃあみんなだけでも早く逃げて!」

人間界の存在が彼らに影響を及ぼさない、なんてことはない。

物をぶつけられたら痛いし、怪我をする。

しかしクー・シー達は首を横に振った。

「リシーラを残していけないよ。だって友達じゃないか」

「そうそう。まずは隠れましょう」

「このままじゃリシーラが飢えちゃうから、僕は食べ物や水を集めてくるよ」

赤いリボンの、少しだけ黒っぽい毛並みのルフアがパツと姿を消す。

「あ、扉を開けたらすぐリシーラの姿が見えちゃう。もっと別の場所へ移動しなくちゃ。土を掘るよ」

青のリボンを巻いたクー・シーと黄色のリボンを巻いたクー・シーが、樽をどけて壁を掘り始める。

犬のようなそのふかふかの毛がある手は、そこまで頑丈そうには見えないのに、さくさくと穴が開いていく。

「この土もどこかに捨ててくるわね。バレちゃったら困るから」

一匹がそう言つて、山になった土を抱えて姿を消し、また現れては土を移動させていく。そうして横穴ができていった。

リシーラが腰をかがめて通り抜けられる高さになった穴は、どんどん奥へ伸びた。しばらく進んだところで、クー・シー達は広い空間を作る。

「この上は敷地の外にある裏山なんだ。空氣の穴を作っておけば、リシーラがずっと地下にいても大丈夫になるはずだよ」

人間は新しい空氣が必要になると知っているクー・シー達は、そんなところまで氣を遣つてくれる。

「よし、先に樽を戻して、壁も戻そう」

リシーラが地中にできた部屋の中に入ると、瞬く間に樽が元の場所に戻され、壁もふさがれた。

これで地下室まで敵兵が来ても、リシーラのことを探し当てることはできなくなるだろう。ほつとしたところで、食料を抱えたルフアが帰ってくる。

穴掘り作業をしていたクー・シー達も物を集める作業に参加し、瞬く間に小さな棚や敷布、マッ

トに寝具、そして衣服も持ってきてくれた。

その合間に、空間はさらに拡張された。

別の部屋ができ、そちらに食べ物や調理器具が置かれて、いつの間にか土で竈かまどができています。

水がめと、薪まきまで持ち込まれて、完全に長期籠城の構えになったところで、リシーラは笑みがこぼれた。

と同時に、クー・シー達の把握している戦況は、良くないのだろうとも思った。

「セレンディア王国の兵は、押されているのね……」

国境から、もう侵入されたに違いない。

リシーラが走って逃げても間に合わないと言われたのは、そのせいだ。

すると近くにいた、手首に青いリボンをつけたイータが言う。

「押されているどころか、ほとんど壊滅してるよ。近くの砦から救援の隊が来るようだけど、それではどうにかなるかな……」

さらに目の前で運んできた寝具を整えていた、黄色いリボンのメギーがふんと鼻息を荒くする。

「もつと沢山連れてこないと、焼け石に水よ。だからすぐには安全にはならないと思うの」

「だから、地下室でやり過ぎすだけじゃだめだったのね」

たいていの兵は、従軍時に略奪に走ることが知られている。

地下室なら食料があるかもしれないと押し入ってくるから、隠れ場所として使えないのだ。

せめて避難場所として目立たない場所に入り口がある地下室を作った上で、別に食料庫を用意す

れば、気づかれないかもしれないが。

「そうすると、対応できる軍が来るまで……最速でも二週間？」

遅くなれば一か月はかかる。

人を集めて、そのための食料も準備して行動を起こすというのは、意外と時間がかかるのだ。

「洞穴から妖精界へっていうのも、まあ、悪くはないかもしれないわ」

子供のための童話では、見知らぬ洞窟から他の世界へ旅立つ物語がある。

そんな感じで過ごそう。

「うんうん。こんな暗い場所から移動したら、妖精界はもっと華やかに見えるよ」

横にいたイータの言葉に、リシーラは微笑^{ほほえ}む。

妖精界も女王も、きつと想像より美しく見えるだろう。

「早く行きたいな……」

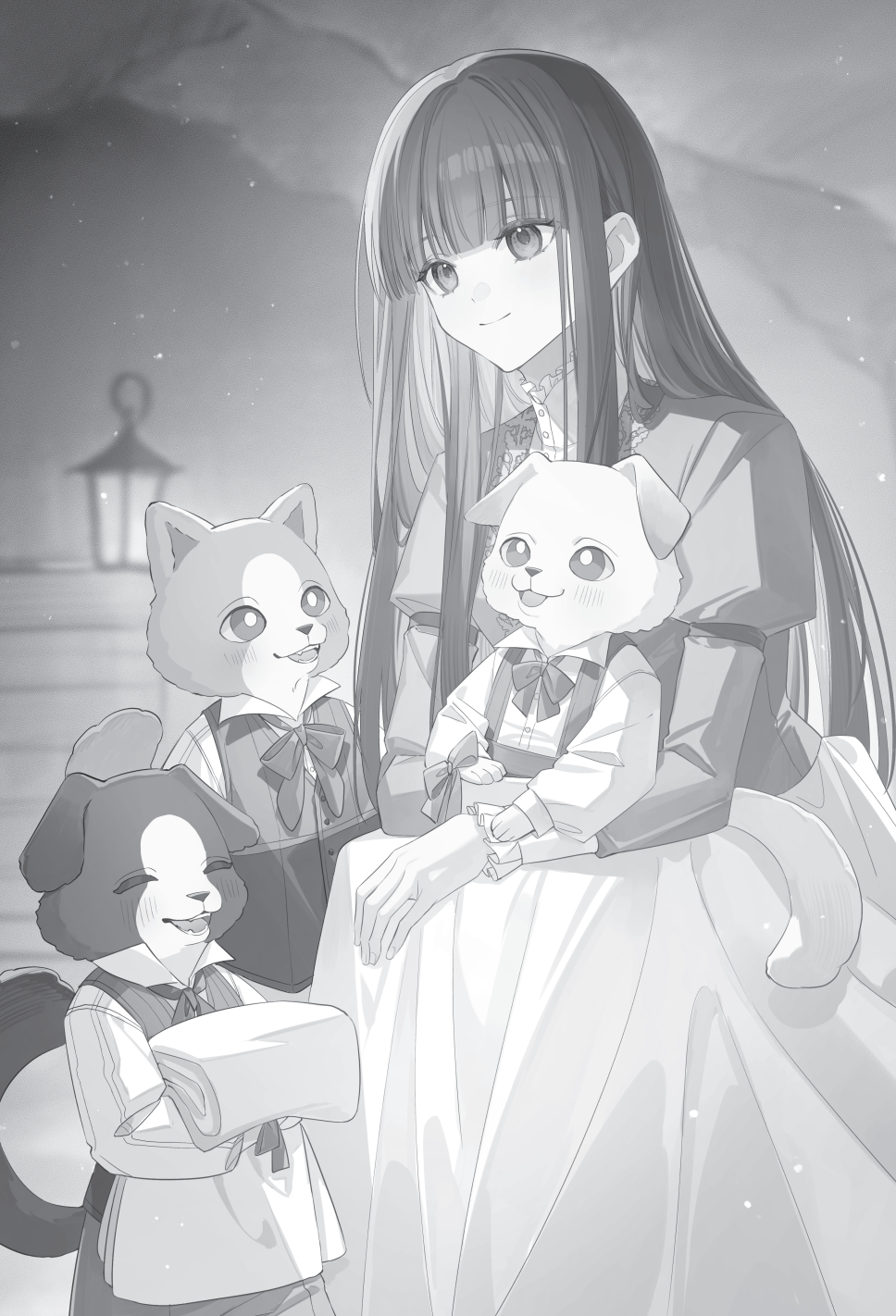
未来に思いを馳^はせながら、リシーラはクー・シー達と息をひそめて過ごすことにした。

それから一日経^たった。

地上はずいぶん騒^{さわ}がしいようだ。

外の様子が知りたいリシーラのため、空気穴の他に、町の音が聞こえる細い穴を作ってもらったので、騒ぎだけは耳に届く。

沢山の人馬の足音。



家の中が荒らされる音も聞こえた。

争い合う剣戟けんげきの音や怒号に悲鳴には、心臓が縮みそうだった。

そして聞こえた断末魔の声に、リシーラはさすがに穴をふさいでもらった。

以後は、静かになるまでクー・シー達と一緒に固まって眠る。

やがて様子を見に行ったクー・シーが、敵兵が町を占拠していることを教えてくれた。

「ここから近い都市まで行くのに、休憩を入れているのか、ここを陣地になっているのか」

リシーラのつぶやきに、外を見に行ったルフアが答える。

「本隊の一部や補給部隊をここに置いて、砦を攻めに行くって」

「なるほど」

それなら、この国の軍が敵を国境へ押し返さない限り、リシーラは地上に出られない。

ちよつとため息をつく。

「今はいいけど、七日もしたら外へ出たくなりそうだわ」

「リシーラはまだ人間だから。外へ出たら死んじやうよ」

すかさずルフアに突っ込まれて、リシーラは「そうね」とうなずくしかなかった。

その後もクー・シー達は、食料などを探しに出てくれていた。

時々リシーラの手持ち無沙汰を解消するための、編み物の道具や本も持ってきてくれる。

そんな風にして一週間が経った頃、クー・シー達はリシーラが驚くようなモノを持ってきた。

「ねえ、これどうしよう?」

それは、血まみれの騎士だった。

血がこびりついた髪は、元は白金の美しい色をしているみたいだ。土で汚れているけど、顔立ちもいい。

年齢もリシーラと数歳しか離れていなさそうだ。

どう見ても、良い家出身の青年という趣だが、着ている胸鎧きょうがいや衣服はそれほど高価なものではなさそうなのが、妙にちぐはぐだった。

背丈もあるので、リシーラの腰ぐらいまでの身長しかないクー・シー達が運んでくるのは大変だっただろう。

「えっ、えええ？ どうして連れてきたの!？」

驚いたリシーラに、青年を連れてきた一匹であるルフアが答えた。

「うーん、妖精がついてて」

「妖精が？」

こくんとうなずくルフア。

「だから拾ってきた」

「……………なるほど」

妖精は、他の妖精のことを気にかける。

ただしいつも一緒にいたり、全員が仲良しこよし、という行動をするわけではない。それでも、ゆるく同じ『仲間』と認識しているようなのだ。

だから他の妖精が困っていると助ける。

リシーラがクー・シー達に助けてもらえるのも、妖精の仲間だと思ってもらえているからだ。そんな彼らが、人間を拾ってきた。

妖精に好かれている人間は、準妖精扱いなのかもしれないとリシーラは推測する。

今は見えないので、この青年にくっついていた妖精は、青年が保護されるとわかって離れたのだらう。

「とりあえず綺麗にしつつ、怪我を確認しないと」

「あ、致命的なのはここのよ」

すかさずメギーが青年の左肩を指し示す。

元は青色だったはずの衣服も、泥と血でぐちゃぐちゃになっていたので、切り裂かれた箇所が複数に見えていたようだ。

リシーラは青年の服をクー・シー達に脱がせてもらい、清拭せいしきをして、傷口だけは水で流した。

あらかじめクー・シー達が薬などを持ってきてくれていたので、それでなんとか手当てをする。

その間に、メギーがどこからか男物の衣服を見つけてきてくれた。

「あら、父のものだわ。まだあったのね」

ロヴァール兵が町までやってきた時、館の中も荒らされ、金目のものは全て盗とられたと思っていた。

クー・シー達とがんばって着せてみたが、青年はリシーラの父より手足が長いので、手首や足首

が見えてしまっている。

意外に肩などの布が余らなかつたのは、肩幅が広いからだろうか。

それでも清潔な服を着せ、怪我に薬を塗った。

ただ肩の傷が、まだ塞がっていないそうで不安になる。傷口が広すぎるのだ。

「縫ったらどう？」

メギーに言われて、リシーラはびっくりした。

「糸と針で!？」

「だって常時くっつけておいた方が、より早く傷が塞がって血も出なくなるでしょ？ だけどずっと誰かが押さえているわけにもいかないし、押し続けるのも良くなさそうだし」

そう、流れ出る血の量は心配だ。

失血死の恐れがあるから、早く血を止めたいのに、まだ少しずつ当てた布に血が滲み続けている。

「僕がやろっか？」

イータが立候補して、ルフアがうなづく。

「イータなら器用だからいいんじゃない？」

それでイータが青年の傷口を縫うことになった。

せめてと、なるべく細い針と糸を用意して、強めのアルコールに浸してから渡す。

リシーラは縫いやすいように青年を支えるため、体を起こした青年を前から抱きしめた。

イータは慎重に縫い始める。

青年は気絶しているし、起こしてもびくりともしなかったので大丈夫かと思ったが、ややあつて、さすがに傷の痛みで起きたようだ。

「んぐっ！」

舌を噛まないように畳んだ布を口に含ませていたので、ぐぐもったうめき声を上げる。

相当痛いのだと思う。とてつもない力で体を締め上げられて、リシーラも悲鳴を上げてしまう。

「治すためだから！」

イータが端的に状況を教えようとした。

「あとちょっと！」

「我慢したら治るわよ！」

ルフアやメギーも青年に状況を伝えつつ、リシーラが圧迫死しないように青年の腕を抱えてくれる。

痛みの中でも、クー・シー達の声は聞こえたのだろう。

青年がなんとかこらえようとしてくれたので、リシーラはあばらを折られることはなかった。

痛みを緩和できないかと、そのまま彼を抱きしめ続ける。

その時間は、さして長くはなかった。

イータは本当に手早く縫い終えて、少し麻痺まひさせることで痛みをやわらげる薬を傷の周辺に塗ると、青年も落ち着いたのか腕の力を抜く。

「もういいよ、寝かせて」

イータの指示で、青年を横たわらせた。

青年も意識はあるようだったが、怪我をしたことと治療されたりしきこと以外はよくわからなかったのだろう。

「ここ、ここ、は……」

「まず先に、水を飲んで」

メギーが折よく水を持ってきてくれる。

枕を少し高くして……と思ったが、クッションがそこまでないので、リシーラが膝上に青年の背中から頭まで載せて抱え、飲みやすいようにしてやる。

水を飲んで青年も少しほっとしたようだ。

少なくとも、周囲にいる私達が、彼を殺そうとしているわけではないことがわかったのかもしれない。

「ここは、どこだ？ くそ、よく見えない……」

苛立たし気に、手で目を押さえる青年。

頭に怪我をしている様子はないけれど、強く打った場合も視力を失うことがある。そういう理由で見えないのかもしれない。

リシーラはほっとする。

周囲にいるのは妖精ばかりだ。その様子を見られたら、何を言われるかと思っていたので。

耳奥に母の『また妖精と話しているわ！ このチェンジリングめ！』という叫び声が残っている

からだろう。

おかげでリシーラは、落ち着いて質問に答えることができた。

「あなたが倒れていた町の、地下室です」

クー・シー達が掘ってくれた場所だとは説明しにくいし、見えにくいのならごまかせるだろうと、リシーラはそう説明した。

「地下室……。お前は、この町の生き残りか？」

「そうです」

彼の言い方から、逃げ遅れた町の人はみんな死んでしまったのだとリシーラは悟る。

同時に、そんな町に置き去りにした父や母の、自分への憎悪を改めて感じた。

嫌いなだけではない。

あわよくばそのまま、自分以外の手にかかっていなくなつてほしいと願ったのだ。

なにせ地下室が敵兵に見過ごされたとしても、占領されて敵軍がいる間は外に出られない。

それではいつか、食べ物尽きたら餓死するだろう。

ひどい最期を迎えるところだった。

妖精界へ行くために、あの家での生活を我慢してきたけれど、今更ながらに怒りが湧く。

——そんな風に扱うなら、どうして私を妖精界から取り戻したの。

——嫌うのなら、いっそ妖精界へ戻してほしかった。

湧き上がる恨み言をリシーラは心の底に押し込める。

今、目の前にいる青年はリシーラの事情など知らないのだから。

「ところで、あなたは？ 騎士様ですか？」

青年の素性を知っておきたいと思って尋ねると、疲れた声で応じてくれる。

「セレンディア王国の騎士、レジェスだ」

自国の騎士だったので安心する。

うっかり敵国の人を助けていたら、どうしようと思っていたのだ。

「国境を破られたという報告を受けて、救援に向かつて……しかし予想以上の敵の数だ。あれは計画して、侵攻を行ったのだろう。国境の担当者は何をしていたのか……」

青年——レジェスはぎりぎりと言を立てて奥歯をかみしめる。

「とりあえず、このまま療養して、怪我を治してください。その間に、セレンディア王国軍が敵軍を押し返してくれるかもしれません」

せめてこの町の近くまで、セレンディア王国軍が来てくれればリシーラは脱出できる。

レジェスも、その時には外へ出られるだろう。

「ところで君は……？」

レジェスの問いに、名前を聞かれたのがわかった。

リシーラは名乗ろうとして、とっさに言葉に詰まる。

知り合うぐらいの簡単な関係なら、躊躇^{ちゅうちよ}はしない。

だけど……。

（もし、クー・シー達のこと気づかれたら。私の名前をチェンジングだと言って回るかもしれない）

警戒したりシーラは、ごまかすことにした。

「リーです」

平民の女性なら、こんな風に簡素な名前の人もいたはずだ。

あまり本名から遠い名前にすると、クー・シー達がリシーラを呼ぶ時に間違ったりしやすくなるし、ここが落としどころだろう。

目くばせすると、察してくれたらしいルフアやイータ、メギーもうなずいてくれる。

一方のレジエスは、名前をそれで認識してくれた。

「リー。あらためて助けてくれて感謝する。しかし救援など来るものかな……」

自嘲気味なレジエスの様子に、彼のいた部隊の最期が悲惨なものだったのだろうとリシーラは想像する。

「それでも、治さないと生き延びられないですから」

やや強い口調で言うと、レジエスは驚いたように口をつぐんで、うなだれたのだった。

かなり傷が深かったこともあって、レジエスはそのまま眠ってしまふ。

やがて怪我が元の熱を出し、その後一週間ぐらいいはリシーラもその看病で^{きぜわ}気忙しくしていた。

熱を下げる薬草をクー・シーに探してもらったり、イータとあれこれ言いながら調べてみたり。

「はい、お薬です」

もちろん、レジエスは目がよく見えないので、飲ませてやらなければならない。

「くっ、子供扱いされなくてはならないとは……」

体調不良もあつてか、レジエスは愚痴をこぼすことが多い。

「そろそろ慣れてください。こぼしますよ。ほらほら」

リシーラはかいがいしく世話をしつつ、なんだか大きな子供を持ったような気分になっていた。

子供扱いされているレジエスの方は、飲んだ苦い薬のせいで苦悶くもんの表情になっている。

いや、薬のせいだけではないかもしれない。

「はちみつあめの飴あめをどうぞ」

「……いらない」

そう言いながら、飴を口に入れると素直になめ始める。

口元はむっとしたままなのだが。

反抗期の子供みたいなものだろうか、とリシーラは笑うのをこらえていた。

でも心配でわかってしまうらしい。

「今、笑っただろう」

「いいえ」

澄まして答えても、レジエスは疑う。

「世話になっているのは確かだが、人を笑うのは感心しない」

「でもしていませんし。それに私は気づかってあげただけですが？」

すると「ぐぬぬ」と黙り込む。

そこヘルファとイータがやってきた。

「そろそろ体拭くー？」

イータの言葉に、レジエスは重々しく応じた。

「すまんが頼む」

クー・シー達には意外と素直なレジエスだ。

リシーラは、そこがちょっと面白くない。

「私の方がずいぶん長い時間お世話しているのに」

言うのと、リシーラの横にひょっこり現れたメギーが言う。

「女の子が相手だから、緊張しているんじゃないの？ 恥ずかしいんでしょ」

「……恥ずかしがってるの？ あれが？」

愛想のない対応だと思えない。

とはいえ、リシーラはまともに年の近い異性と会話したことがないので、本当に恥ずかしがっているだけの可能性もあるか……と考えてしまう。

なにせリシーラは、使用人の男性達とも必要以上の会話をしたことがない。

（なにせチェンジリングですものね。しかも両親である子爵夫妻に嫌われた娘ですもの）

仲良くしてもうま味があるどころか、職を辞めさせられかねない相手では、関わることそのものが嫌だったのだろう。リシーラもそんな想像はついていた。

レジェスは、お湯や布を持ってきたルフアとイータと一緒に、ついで衝立の向こうに引っ込んだ。
「うふふふ、かわいい」

メギーがその様子を笑っているが、リシーラはそれより気になることがあった。
こそこそとメギーにささやいた。

「そういえばレジェス様って、メギー達のこと、ちゃんと騙されてくれているの？」

よく見えないとはいえ、輪郭はわかるらしいのだ。それなら、クー・シー達が人ではないと感じるはずだ。

なにせ介助の時に差し出される手は、毛むくじやら。

これで気づかないわけがない。

「私、適当に『近くの山岳民族で、出稼ぎのために下働きをしていた』とか言ってしまったけど……」

「まあ、おおむねそのまま信じているみたいよ？」

「ほんと？」

リシーラが疑うと、メギーが小さく笑う。

「妖精だなんてわかったら、今頃大騒ぎしているわよ。イータが毛皮を着込む特殊な民族で、商人の家に^{おまじめ}出稼ぎに来てたと言ってみたら、『そういう者達もいるのか』と大真面目に聞いていたそうよ。だから大丈夫。もう少し目が見えるようになったら、今度は頭も^{かぶ}被り物をして、山の神への敬意を表しているとか何とか、またでっち上げておくわ」

「うん……そうね」

現状、そうやってごまかす以外にはやりようがないのだ。

それに傷の回復のためにもレジェスは身ぎれいにしておくべきなのだが、女のリシーラでは手伝いきれないし、どうしてもルフア達の手が必要になる。

助けると決めたものの、こういったところに問題が出るなんて、あの時は考えつかなかった。少し後悔しつつ……。

でも、助けて良かったとも思う。

例えば食事の時。

「……ごちそう様。おいしかった」

レジェスは食べ終わると必ずそう言う。

作ったりシーラは、それだけでも稀有な体験をしている、と妙な感動があった。

今まで何かしても、素直にありがとうとか、ねぎらわれることが少ない人生だったから。

完全にリシーラの事情を知らない他人だからこそ言ってくれるのだとわかっているけど。

でも、妙に嬉しい。

そんな穏やかな時間の中でも、何度か、ロヴァール軍は周辺の村や町を襲撃していたようだ。

おそらくは食料なんかを強奪するためだろう。

その時に人が連れてこられていたようで、尋問のためなのか、それとも別の目的で虐げられているのか、空気穴の向こうから悲鳴が届くことがあった。



地下の空洞が見つかったら、リシーラだってどうなるかわからない。

だからなのか、思わずリシーラは青ざめてしまった。

その時、側にいたレジェスが手をさまよわせるように動かし、リシーラの頭に触れた。

「え？」

何がしたいんだろうと思ったら、頭の輪郭をなぞるように両手を動かし、リシーラの耳をふさいでくれる。

「聞かなくていい。私達が代わってやることはできないし、助ける力があるわけでもない。できるのは、無念を晴らすことだけだ。それも今はできないなら、知らない方がいい」

「でも……」

リシーラは「でも」と思ってしまう。

一人ぐらいは救えるかもしれない。

そんな、かすかな可能性を思いついてしまうから、なおさら苦しい。

ここまで考えて、リシーラは自分の苦しき原因に思い至る。

（助けてあげたいんだわ、私）

あんな風に悲鳴を上げる気持ちを知っている。

そして助けを求めても、誰も手を差し伸べてくれなかった絶望も。

だからこそ居ても立ってもいられないのに、何もできないとわかっているから……余計に苦しいのかもしれない。

（助けられたとしても、それは私の力ではできないことで。クー・シー達に頼んでももらわなければならぬ。でも見つければルファ達が殺されてしまう。私に、責任がとれることじゃない）

レジェスの言葉から、リシーラは自分の苦しさの原因にたどりつく。

そしてレジェスは、知らなかったことにしろと言っているのだ。

自分を、大事な身内を守るために。

「命が大事なら、やるのは勝機があるものだけにすべきだ。たとえば千人の味方がいたうえ、外部の味方とも連絡がとれていて、逃がした人をきちんと保護できる状態だとか。今の私達には何もないんだ」

リシーラはうなづく。

「そうね……」

足の遅いリシーラでは、おとり罠にすらなれない。

自分には何も手伝えないのなら、諦めるべきだ。

ようやくリシーラは、諦めがつく。

肩の力が抜けたのを感じたのか、レジェスが言った。

「君も、怯おびえることがあるんだな」

「……怖いものが何もない人なんていないでしょう」

いるとしたら、心が壊れてしまっている人ぐらいだ。

「それはそうだが……。君は逃げ隠れしている状況でも、ずいぶんと落ち着いているから。見えな

いぶん、君が動揺しているかどうかなんて、こうして触れないとわからない」

触れないと、というところでリシーラは、ずっとそのままの態勢だったことに気づく。

（は、はずかしいけど、どうしよう）

地下は涼しすぎるせいで、耳が暖かくて心地よかったのか、つい放置してしまっていた。

だけど改めてこれは必要ないと言にくい。

邪魔だと言うのは違うし、必要ないと言うと、そのままにしていたことをつかれてしまいそう
だ。

だからリシーラは、ついぶつきらぼうになる。

「……その、もういいんですけど、これ」

「あ、すまない」

慌てて手を離れたレジェスの方も、何か言わないといけない気分だったのだろう。

しどろもどろに弁解し始める。

「君の表情がわかるから、ちょっと話していて楽だと思ってしまつて。その、決してふとどきな気持ちで触っていたわけではなくて……」

レジェスの話を聞きつつ、リシーラは気づく。

（もう、苦しくない）

悲鳴は聞こえなくなっていた。

だけど最初は音が遠ざかっても感じていた息苦しい気持ち、なんだかなくなっていた。

(それに、こんなに慌てているレジエス様も珍しい)

リシーラを落ち着いていると言うレジエスだったが、彼の方だつてたいがいだった。

知らない場所に連れてこられたことに、混乱していたのは最初だけ。後は自己紹介後も淡々としていたのだ。

けれどこの日から、彼の言動が急速にやわらかくなった。

そして積極的に、リシーラ達に話しかけるようになった。

苦労の甲斐^{かい}あつてか、レジエスもひどい怪我^{けが}だったのに膿^うむこともなく回復していく。そうしてしばらく経った頃だった。

再び空気穴を通じて、外の喧騒が聞こえた。

それだけなら慣れてきていたが、上からの振動がすごい。

重たい物がドンドンと叩きつけられるような、びりびりとした衝撃が伝わる。

天井からもパラパラと土が落ちてきた。

背筋が冷たくなったリシーラは、小声で確認した。

「火は？」

「今はついてないよ、リー」

「匂いがしそうなものは蓋をしてくれる？」

「わかった」

「空気穴も、一時的に閉じて」

クー・シーにそう頼んだりシーラは、久々の発熱でぼんやりしているレジエスの口を手で覆った。
「何……」

「敵兵がたぶん、この地下室近くにいるんです。空気の入り口からこちらの物音が聞こえるかもしれない。だから、黙って」

リシーラの指示に、レジエスも大人しく従う。

空気穴は、こちら側に近い場所を少し閉じたただけだ。

穴はまだある。

だから地上部の穴が見つかった場合、人が潜んでいる可能性に気づかれたあげく、火がついた物を投げ込まれたり、煙で燻^{いぶ}されたら大変だ。

次の穴を開けるにしても、煙がそこから吹き出したら、やはり地下に人がいるとわかってしまう。気づかれないようにするしかない。

空気穴を少しふさいだのに、がやがやという声が聞こえる。

ドン。

と音がして、さらに天井部と穴の方からパラパラと土が落ちてきた。

（くずれたらどうしよう）

クー・シー達がどうかしてくるかもしれない。だけど、リシーラだって妖精の力を知り尽くしているわけではないから、どうなるかわからないのだ。

とつさにレジエスの上に覆いかぶさって庇^{かば}ったリシーラは、音が聞こえなくなってもそのままの

姿勢でいた。

視線をルフアへ向ける。

ルフアはうなずき、外の様子を見に行くため姿を消す。

ややあつて、ルフアが戻ってきた。

「いなくなつたよ」

「一番大きな音の原因は？」

「どうやら、馬車の荷車部分をこの上周辺に置いていたみたい。つないでいた馬から金具を外す時に、重たかったから振動が来たんじゃないかな」

「馬車……」

なんでそんなものを？ この上は町はずれのはずだが。

疑問に思っていると、リシーラの下から申し訳なさそうな声がした。

「大変な状況のところすまないが、そろそろどいてくれないか？」

気づけば、リシーラは完全にレジエスに上から抱き着くような形になっていた。

あまりに近すぎる距離のせいなのか、レジエスが珍しく頬を赤くしているように見える。

「ご、ごめんなさい」

「いや……庇ってもらったのはこちらだ」

以前は人慣れしていない野良犬みたいだったレジエスも、今回ばかりはしつぽが垂れ下がっているように殊勝な態度だ。

「ところで馬車を置いていったということだが」

「ええ、何かわかります？」

彼なら、リシーラよりもこういうことに詳しいはずだ。

見解を聞きたいと思ったりリシーラに、レジエスは言う。

「もしかすると、撤退をするつもりかもしれない」

「撤退……敵は、負けているのでしょうか？」

「目的を達成したのかもしれない。何かを持ち去るつもりだったとか、交渉に成功したとか。理由は色々と考えられる」

攻め込んだ国を滅ぼす以外にも、わざわざ大軍で国境を越える理由は沢山あるらしい。

「それなら、もうすぐ地上へ出られるのかもしれませんがね」

「ああ」

うなずいたレジエスが、目を閉じて何かを考え込む。

彼の目は、まだぼんやりとしか見えないらしい。

（その目では、もう騎士は続けられないかもしれない……）

だから、この先のことを考えて落ち込んでいるのだろうか？

なくさめるべきだろうか、とリシーラは悩む。

リシーラの方は、気づけば待ちに待った十八歳の誕生日が間近に迫っている。その日までしっかり生き残れそうなので、毎日心穏やかに過ごせるようになった。

看病をしているレジェスも順調に回復をしているし、地中に潜む生活が多少キツイのぐらいはなんでもない、という気分だ。

——だからだった、と思う。

少しぐらいいは、レジェスにも未来に希望を持つてほしいと願ったのは。

「きつと生きて帰れば、ご親族も喜んでくださいますよ、レジェス様。目はここから出て、良いお医者様にかかれば良くなりますとも」

「いや、目のことではないんだ」

悩みはそれではなかったらしい。

「命を救ってくれた君に、どう恩を返したらいいかと」

「私はいんです。仲間もいますし、今だってけっこう快適に暮らせていますし」
まさか妖精界へ行くなんて言えるはずもない。

適当にごまかしたリシーラだったが、レジェスは首を横に振る。

「いや、私が平気ではなくて。だから……こんなことは初めて言うんだが」

「はい？」

「私と一緒に来てくれないか？」

「え？」

よくわからず、思わず聞き返してしまう。

「一緒について、どこへですか？」

「私の家で、一緒に……いやそうじゃなくて」

レジェスは一度深く息を吸って、それから言った。

「結婚してくれないか？」

リシーラはびっくりする。

まさかレジェスが、そんなことを考えるとは思わなかった。

（そんなに感謝しているのかしら？　恩に感じすぎて、結婚という形で一生を保証しようと思ってるの？）

そしていつものリシーラなら、即答でお断りしていただろう。

でもリシーラはできなかった。

レジェスは、よく見えない目をリシーラに向けて、そうして唯一側にあることがわかったのだ。うりシーラの手を取ると、祈るように握って自分の額を当てたのだ。

お願いように。

「私は、貴族家の出身ではあるが、その立場を追われている。両親もいない」

リシーラは驚く。

貴族出身なのは予想通りだが、あまり周囲の状況は良くないらしい。

「だからか、両親を失った後は……生きる意味がよくわからないんだ。戦場で命を落としてもどうでもいいと思っていたから騎士になったし、戦っている間は、少なくとも役に立つと実感できていた。だけど目が治らなければ、それすらもなくなって、この先を生きていく自信がない。だけど君がい

れば。まだ生きていこうという気持ちになれるんだ」

「そんな。私がいたからといって……」

レジェスのことを助けたけれど、それは人命救助だったから。

それ以上は何もしていない。

ややぶつきらぼうなレジェスと、かなり打ち解けてきたとは思う。けれど、リシーラは妖精界へ行くことで頭がいっぱいだった。

だから彼との関係を、愛や恋といった面から考えたことがなかった。

(ましてや結婚だなんて。……でも、見知らぬ男女がずっと一緒に暮らしてきたんだから、レジェス様は何かを感じたのかもしれない。例えば、家族みたいな感覚を)

家族を失ったからこそ、未来に希望が見出せなくなったのだと思う。

だから家族という光が欲しいのだとわかるけど。

「君以上に、信じられると思った人は、今までいなかったんだ」

その言葉に、リシーラは胸を衝かれる。

君を大事にするとか、お城を用意するとか、そんな言葉よりも強くリシーラの気持ちを揺らした。

彼が『信じられる人』という存在を^{わち}臺にもする思いで掴みたがっているからだろう。

リシーラも、ずっとそんな気持ちを持っていた。

妖精しか信じられない。

でも妖精と一緒にこの世界で生き続けるのは難しいし、リシーラを人間の世界に呼び戻した両親

こそが最も嫌いな相手になってしまったために、この世界にも嫌気がさしてしまっている。

そんな中、初めてリシーラは、同族を発見した気持ちになった。

だから後ろめたい。

リシーラはもうすぐ解放される。

妖精界で新しい家族を得られるから。

でもレジェスは、この先もそんな気持ちを抱えて生きなければならないのだ。

……リシーラが助けてしまったから。

でも迷う。

（口先だけの約束なら、いくらでもできるけど）

できれば確固たる約束はしたくない。

妖精界へ行く障壁になつては困るからだ。

ただひたすら、レジェスを置き去りにするようで気が咎める。

そのせいか、つい言ってしまう。

「お友達などはいないのですか？ 騎士になるまでも、年数がかかると伺いました。その間に沢

山の方と交流があったのなら……」

貴族出身だからといって、ぼろっと騎士になれてしまうわけではない。

見習いとしてある程度下積みも必要だし、その間に横のつながりができ、友人もできていくはず

なのだが。

「友人はいます。だけど、奴と背中を守り合うことができなくなれば……」

目が治らない限り、その友人とは離れるしかない。

（逆に言えば、今すぐにその友人は離れたりしないのね）

おそらく背中を預け合った相手が負傷していれば、その友人は見捨てたりはしないだろう。救助したリシーラ達にも、当初はすぐに打ち解けずにいたレジエスが友人と言うのだから、かなり仲が良いはず。

（居場所へ戻ったら、きっと大丈夫）

頼れる相手がいると確認できて、リシーラは少し心が軽くなる。

どうにか曖昧に濁して、返事を引き延ばしているうちに、仲間達のところに帰してしまえばいい。（仲の良い人と一緒にいたら、一時的に側にいただけの私のことなんて忘れるでしょう。もし探したとしても、チェンジリングのことをどこかで知ったら、求婚したことを後悔して、なかったことにしたくなるはずよ）

想像して、リシーラは心の中でちょっとだけ苦い思いをかみしめていた。

しかしレジエスが笑う。

「本当は、もっと早く言おうと思った。まだ看病が必要な時に言おうかと」

「はい？」

「なにせ傷が治っていない時なら、君は同情するだろうし、可哀想に思っかわいそうて断りにくくなるだろう？ でも、そんな卑怯ひきょうなことは嫌だった」

紳士的な姿勢はいいのだけど、そう言われると肯定しにくい。

「そんなことは……ありません」

否定すると、レジェスは挑戦するように続けた。

「では、君の誰かを選ぶ基準を聞かせてほしい」

「う……」

結婚なんて考えたこともなかったリシーラに、基準なんてものはなかった。

でも今ここで妖精界の話も、チェンジリングのことも話すわけにはいかない。

レジェスが妖精のことを嫌がる人だった場合、そこから連想してルファ達クー・シーに何かひどいことを言うかもしれないからだ。

（何か、結婚してもいい条件……）

リシーラは頭を悩ませながら絞り出した。

「その、金銭的に苦勞しないというか、でも裕福に暮らしたいというのではなくて、食費のことで悩まずに済むとか、そういう……」

「わかった。この目のことがあっても、君にそれなりの暮らしは保証できる」

「ぐ……。それでは、嫁姑しゅうとめの問題みたいなのが起らない相手がいいので」

とつさに何かの物語で読んだ、嫁姑問題を出してみる。

「私に両親はいない。祖母もいない。祖父はいても関わることはないな。問題ない」

すぐさまレジェスに解決されてしまう。

ならばと、女の子らしい条件を出した。

「一生、心変わりしない人じゃないと」

「しない」

ふっとレジエスの声の高さが変わった気がした。

真剣さが増したような緊張感に驚いている間に、レジエスがリシーラの手を握る。

「君以上の人を、見つけられない。そう確信してる」

そう言いながら、レジエスはリシーラの手ひらに口づけてきて。

リシーラは一気に頭の中が真っ白になった。

「へっ!? ああ!」

「お願いだ。私と結婚してくれないか?」

「手を!」

「うんと言ってくれさえすれば、放そう。どうしても君の答えが聞きたい。騎士を続けられなくな

りそうな、こんな男ではだめだと思っただけならそう言っただけでいい」

そう言いつつレジエスは、リシーラの指先にかみつこうとして……。

「あの、わかりました! わかりましたから!」

「本当か! ありがとう!」

レジエスが感謝を叫びながらリシーラの手を口づける。

(だから手を放して恥ずかしい!!)

リシーラはもう、生まれて初めて手に口づけられたことだけで、心の中がいっぱいいっぱいだった。

「出会ったばかりだから、ゆっくりと付き合う期間を設けてもいいと思っていたんだが、受けてくれて良かった」

レジェスは初めて、ほっとしたような素の表情を見せた。

けれどリシーラはそれどころではない。

（うう、わかったって言ってしまった）

結婚したわけじゃないけど、その申し出に返事をしたのはどうなんだろう？

気もそぞろになってしまう。

（でも待って。了解したわけじゃないわ。話の内容についてわかった、という意味だと私が思えばどう？）

それなら決定的なことは言っていない。

約束だっと思っていることになる。

そうして自分の心を落ち着けたリシーラだったが、そうするとレジェスに嘘をついたという、後ろめたさを感じるようになった。

約束したと思ったら、ただの返事だったと気づいたら、レジェスは怒るだろうか？

悲しむだろうか？

そこは気になったし、悲しませたら悪いとは思う。

でも、レジェスもリシーラを驚かせるという手を使ってきたのだから、仕方ないと思ってほしい。
(それに妖精界へ行ったら、もうレジェス様とは会うこともないのだから。必然的に結婚はできないと諦めてくれるわ)

リシーラはそう願うばかりだった。

そんな風に嘘をつき続ける時間は、あまり長くはなかった。

数日後、地上が再び騒がしくなった。

それは半日も続く。

やがて様子を見に行ったクー・シーが、セレンディア王国の軍が到着したこと、敵が撤退していることを教えてくれた。

そこでリシーラは、まだ本調子ではないレジェスを、深く眠らせた。

精神が不安定な母親が寝付けるようにと、薬草師から処方されたお茶で。

そうしてぐっすりと眠ったレジェスを、セレンディア王国の軍の野営地近くに移動させた。すぐに見つけられそうな道の端に置き去りにしておけば、見逃されることはないだろう。

「……本当にいいの？」

心配して聞いてくれたのはルファだった。

「うん。私は妖精界に行くんだから、ここでお別れしないと」

真剣に求婚してくれたのは嬉しかった。

なにより、それが誰もが恋心を一瞬で抱きそうな人だったことは、人間界で暮らした最後の思い出としてかなり上等だと思う。

それに……と思い出すのは、婚約したと思い込んだレジエスのここ数日の優しさだった。

なにくれと氣遣ってくれるその氣持ちが、あまり人に恵まれてこなかったリシーラには、とてもまぶしくて、申し訳ない氣持ちにさせるものでもあった。

「さようなら、レジエス様」

リシーラはそう言い、ルフアと一緒に先に地下へ戻る。

途中でふと振り返った時、レジエスの側に置いたランタンの光が見えた。

その瞬間、ちゃんとセレンディア軍がレジエスを迎えに来るのか見届けなくなる。でも姿を誰かに見られたら、ひっそりと別れるつもりだったのに台無しになってしまう。

だからリシーラは、物思いを振り切って、地下へ戻った。

そしてソファに座ろうとしたところで氣づいた。イータがいない。

「あら、イータは？」

尋ねたリシーラに、メギーが答える。

「一応、レジエスが回収されるとこまで見てくるって言ってたわ。氣になるんでしょうね」

イータが見てきてくれるのなら安心だ、とリシーラはほっとする。

怪我をした自軍の騎士なら、放置はされないと思うけれど、人生は何があるかわからないのだ。

教えてくれたメギーは、お茶を淹^いれてくれていたらしい。

「はい、リシーラ」

「ありがとう」

受け取ったリシーラは、温かなお茶の入ったカップを手にしてから、ふと地下の寒さに気づく。そしてルフアのいるソファを見て、こんなに大きなソファだったかと思った。

たぶん、いつもそこにいたレジェスがいらないせいだろう。

同じようなことを感じたのか、メギーが言う。

「狭い地下のはずなのに、今日はなんだか広く感じるわね」

メギーも少し、寂しいのかもしれない。

そう思ったリシーラは「うん」と言ってうなずいた。

それから数日は、妖精界のことだけ考えて過ごしていた。

外も安全になったので、何も心配せずに穏やかに過ごしていったのはいいのだが……。
一つ問題が発生した。

「なんだかおかしいわ」

リシーラは側にいたイータに言う。

「何日待っても、妖精界に招待される気配がないのだけど、どうしてかしら」

十八歳の誕生日は、もう過ぎていた。

不安を抱えつつ、さらに二週間ほどが過ぎる。

地下で過ごし続けては体に悪いからと、少し離れた山小屋に住まいを移動していたリシーラは、ただひたすらその日を待っていた。

妖精界とは時差があるのかもしれない、と思い直したからだ。

でもセレンディア王国の軍が町を立て直し始めても、行商人や町から逃げた人が戻ってきてても、全く妖精界へ行ける気配がない。

「おかしいわ……」

クー・シー達と頭を突き合わせて考える。

「原因に思い当たることは？」

「何もしてないわ、私」

「だよねえ」

ルファがうなずく。

「僕もリシーラと一緒にいたんだし、問題になりそうな出来事はなかったと思ってるけど。まさか、妖精界の物を食べてから時間が経ちすぎたせいとか？」

イータが「女王様に聞いてくるべきかな」とそわそわする。

そんな中、メギーが渋い表情をしていた。

「もしかしたらなんだけど……」